

---

# 九十九里少年探偵団シリーズ「高校文化祭の事件」

ともゆき

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

九十九里少年探偵団シリーズ「高校文化祭の事件」

### 【Nコード】

N7386D

### 【作者名】

ともゆき

### 【あらすじ】

九十九里学院高校の文化祭に遊びに行った「九十九里少年探偵団」の6人。そしてそこで起きた事件とは？ シリーズ第3弾。

(前編)

10月のある日、千葉県茂原市にある九十九里学院小学校のある教室。

「…文化祭？」

鶴田信幸が森沢涼子に聞いた。

「うん。今度の土曜日と日曜日に高校で文化祭があるんだって。それで唯のお兄さんが遊びに来ないか、って言ってるんだって」

「…本当なの、唯ちゃん？」

佐々木圭亮が早乙女唯に聞いた。

「うん。ウチのお兄ちゃん、今年高校に入って初めての文化祭なんだけど、どうせ学校も休みなんだし見に来ないか、って言ってるの。それであたしが友達も誘っていいか、って聞いたらお兄ちゃんもいい、って」

「ふーん…」

「その、早乙女さんのお兄さん、って文化祭の実行委員か何かやってるんですか？」

原和美が聞いた。

「いや、別に何もやっていないんだけど、当日はどこでも案内してやる、って言ってたわ」

「私と涼子さんはもう唯さんと一緒に行くことを決めていますけれど、信幸さんたちも一緒に行きませんか？」

藤堂みこだった。

「そうよ、みこの言う通りよ。きっと楽しいわよ。ね、唯？」

「そ、あたしも高校の文化祭、って初めてだからどんなところか楽しみにしてるんだ」

「そうですね。私も楽しみです」

唯、涼子、みこの3人の少女は早くも盛り上がりつつあるようだ。そんな様子を横目で見ながら、

「…どうします、圭亮くん？」

和美が圭亮に聞いた。

「こりゃ断れないムードだろ。な、ノブ」

圭亮が信幸に言う。

「…まあな。でも、こういう時ってホント女の子は強いな…」

信幸がつぶやく。

「まあ、いいじゃないか。将来オレたちが入ることになる高校を見ておくのも悪くないだろ？」

「…圭亮、お前高校入れるほど頭よかつたっけ？」

「大きなお世話だ！」

\*

千葉県茂原市にある九十九里学院は私立、ということもあって幼稚園から大学までそろっている学校で、九十九里学院小学校に通っている児童たちは殆どが九十九里学院中学校に進学し、さらに大多数の生徒がそのまま九十九里学院高校に入学することになる。

勿論中学校を卒業して他の学校に通う生徒もいるし、他の中学校から九十九里学院高校に入ってくる生徒もいるのだが、九十九里学院高校に通っている生徒は「小学校からの顔なじみ」というのが多いのである。

そして信幸、圭亮、唯、涼子、みこの5人は幼稚園のときから7年間同じクラスで「5人組」として学校内でも結構知られていたのだった。

そういつたこともあってか、この5人の連帯感と言うのはかなりのものを持っているようで、その連帯感はこの年の春、パリの日本人学校から転入してきた和美が加わり「6人組」となった今でも変わっていないようだ。

\*

さて、その週の土曜日。

「私立九十九里学院高等学校」と看板がかかっている正門の上には「九十九里学院高等学校文化祭」とアーチがかかっている。

快晴の秋晴れ、ということもあってか次々と学校に來客が入っていく。

「…いやあ、こう改めてみると、すげえ学校だなあ…」  
圭亮が言う。

「正門はしょっちゅう見てたけど、中には入ったことがなかったからな」

信幸が言う。

「とにかく中に入ろう」

唯に促されて6人は次々と正門をくぐって行った。

「…ねえ、唯。お兄さん、どこらあたりで待ってるの？」

涼子が唯に聞いた。

「うーん、このあたりで待っている、って聞いたんだけど」

そう言いながら辺りを見回す唯。

と、校舎の前で九十九里学院高校の制服であるブレザーを着た1

6、7歳の少年が腕を組んで立っていたのを見つけた。

「…あ、いたいた。お兄ちゃん！」

そう言って手を振りながら、唯がその少年に駆け寄り、なにやら会話を交わしながら歩いてくる。

そして信幸たちの前に立ち止まる二人。

「おっ、お前たちか。唯が言っただ友達、ってのは」

「わあ…」

その少年の端正な顔つきを見て涼子とみこが思わず声を上げる。

「…早乙女さおとめかすこ一人だ、よろしく。唯がいつも世話になってるな」

「あ、は、はじめまして。森沢涼子です」

「藤堂みこです」

「…君たちは？」

そういつと一人は信幸たちのほうを見る。

「あ、鶴田信幸です」

「佐々木圭亮です」

「原和美です」

「そうか。早速だが、案内してやるから来いよ」  
そう言うと一人は唯と並んで歩き出した。

その後ろをついていく信幸たち5人。

\*

「…やっぱり高校はスケールが違いますね」

あちこちを見ながら和美が言う。

「スケールが違う、ってどういうことですか？」

みこが和美に聞く。

「ああ、それですか。ボクのいたパリの日本人学校でも現地の人たちに日本の文化をしてもらおうということで、年に一回似たような催しをやってたんですよ。まあ、学校の規模もありますけど、これほどのものじゃありませんでしたけどね」

「…ってことはお前か？ 唯が言ってたフランスからの帰国子女、  
って」

一人が和美の方に向けて聞いた。

「え？ ええ」

「どうだ、日本の生活には慣れたか？」

「ええ、皆さん優しいですから」

「そうか」

それだけ言うと一人はまた前を向く。

「…唯、お前も和美とか言うヤツの面倒をちゃんと見ているんだろ  
うな？」

「ちゃんとしてるわよ。…ところでお兄ちゃん」

「何だ？」

「…ほら、美術室で何かやってるの？」

見ると「美術室」と表示がされた教室の中に次々と客が入っていく。

「…なんだろう？」

涼子が言うと、

「ああ、あれさ。いや、この間の市の展覧会で入選したこの絵が展

示してるんだ」

「…そう言えば、九十九里学院高校の生徒さんが入選した、って話聞いたことがありますよ」

みこが言う。

「ねえ、お兄ちゃん。見てもいいかな？」

唯が聞く。

「お前も結構そついうのが好きなんだな。見てきていいぜ」

「涼子、みこ。行こう」

そして3人の少女は中に入っていく。

「…どうする、ノブ？」

圭亮が聞く。

「しょうがない。付き合っつてやりますか」

そしてその後ろから信幸たち3人と一人が入っていく。

その絵は額に入れられ、美術室の一番目立つところに飾られていた。

「これがその入選した絵ね…」

唯がつぶやく。

その絵はよくある人物画のだが、確かに見ているものをひきつける魅力のようなものがあつた。

「ふーん、この絵、椎名が描いたのか…」

「椎名？」

唯が隣で見ていた一人に聞く。

「オレと同じクラスの女子だよ」

確かにその絵の下には「画・1年 椎名早苗」と言う名前が書かれた紙が貼られている。

さすがに感心したか、彼らがしばらくその絵を見ていると、

「あら、早乙女君。珍しいわね、こんなところに来るなんて」

髪の毛の長い、一人と同じ九十九里学院高校の制服を着た女生徒が話しかけてきた。

「おいおい、オレだって芸術を愛する心くらい持っているぜ」

「…芸術、って早乙女君に合わない言葉ね」

眼鏡をかけた女生徒が言う。

「合わない、って…。オレのクラスのヤツから入選が出た絵なんだから、気になるじゃないかよ、やっぱり」

「…しかしまあ、早苗の絵が入選するなんて思わなかったけど」

今度はショートカットの少女が言う。

「お前らもしかしたら、自分たちを差し置いて椎名が入選したのを僻んでるのか？」

「そ、そんなこと思ってないわよ！ 九十九里学院から入選が出た、ってみんな喜んでるんだから」

「ホントかなあ？」

「…まったく、どうして、こう早乙女君、って疑り深いのかしら」  
眼鏡の女生徒だった。

「…そういえばその、椎名はどうしたんだ？」

一人がショートカットの少女に聞いた。

「ああ、早苗は今日は午前中抜けられない用事がある、って言うってたから午後からやってくるんじゃないの？」

「そうか。じゃ、また後で来るわ」

「折角だから早乙女君に手伝ってもらおうかな、と思ってたことがあったのに」

「わりい。オレ、今デート中なんでね。それじゃ」

そう言いながら一人は6人を連れて教室を出て行った。

\*

「…何なの、お兄ちゃん。あの3人？」

唯が一人に聞いた。

「ああ、松竹梅トリオか」

「松竹梅？」

「ああ、美術部の中でも特に実力がある3人でさ。髪の毛長いのが松野、眼鏡かけてたのが竹原、ショートカットが梅沢って苗字なんだ」

「…だから松竹梅か…」  
信幸が呟く。

「ああ。中学のときから美術部にいたとかで、その実力は先輩たちですら舌を巻いているくらいだからな。オレもあいつらのことは中学から知ってたけど、まあ、絵に関しては素人のオレでもあの3人の絵はよく出来ていると思うよ。ただ…」

「…ただ？」

唯が一人に聞いた。

「…あの入選した絵の作者、いるだろ？」

「うん、確か椎名早苗、だったっけ？」

「ああ。その椎名、つてのは、別の中学から九十九里学院高校に来た子なんだけどさ。最近凄く実力が上がってきてな。例の展覧会にあの松竹梅も椎名と一緒に絵を出展したんだ。で、オレたちの間でも3人のうちの誰かが入選するだろうな、と思っっていたんだけど、3人を差し置いて椎名が入選してな。あの3人、口では椎名の入選を歓迎しているんだけど、最近それほど悪くなかった椎名と松竹梅の仲が悪くなってきたって話なんだ」

「…つまり、彼女の入選に3人が嫉妬している、と」

「…そういうことになるな」

\*

そしてあらかた回った後、一人は左手にしている時計を見る。

それを見て反射的に和美もポケットから携帯電話を取り出すと信幸たちがそこに集まる。11時40分を回ったところだった。

「…なんだ、もう昼近いのか」

そういうと一人はブレザーの内ポケットから財布を取り出した。

「…そのコンビニで何か買ってくるから、正門で待ってる。唯、一緒に来い」

「うん」

そういうと早乙女兄妹は近くのコンビニに向かっていった。

\*

そして二人がコンビニで買ってきたおにぎりやパンで7人は開いているところを見つけて昼食と相成った。

「…ところで、唯から聞いたんだけど、君たちの学校の先生、ラグビーにいた須崎選手なんだって?」

「あ、はい」

「お兄さんもサッカーをやられているんですか?」  
みこが聞く。

「…いや、オレはラグビー部だけどね。須崎選手の話はサッカー部の連中の間でも話題になっているんだよ。それでさ、唯から聞いたんだけど、お前たち探偵ごっこやってて、その須崎選手が追っ前の監督者なんだって?」

「まあ、その…、先生が監督になる条件で許してもらってるんで「ふーん…」」

そういいながら一人がおにぎりにかぶりついたそのときだった。  
なにやらわいわい騒ぎながら大勢の客が学校の中に入っていった。

「…? どうしたんだ?」

「…何かあったのかしら?」  
そのときだった。

「あ、いた。早乙女くん!」

ひとりの女生徒が一人たちの所に駆け寄ってきた。  
「…? どうしたんだ?」

一人が聞いた。

「美術室で大変なことが起こったのよ!」

「美術室で?」

「…とにかく行ってみよう!」  
信幸の声に5人が頷いた。

美術室の前には既に人だかりがしていた。

「あ、早乙女くん…」

ひとりの少女が一人に話しかけた。

「…どうしたんだ、椎名？」

「どうやら、この女生徒が一人の言っていた椎名早苗のようだ。」

「絵が…、あたしの描いた絵が…」

「絵がどうしたって？」

「お兄ちゃん、見て！」

唯の声にその場にいた全員が絵のほうを向く。

「これは…」

そう、正面にかけられていた椎名早苗の描いた絵のキャンバスが何者かによって左上から右下にかけて大きく切り裂かれていたのだ。た。

（後編に続く）

(後編)

「九十九里学院高校文化祭 臨時駐車場」と書かれた看板が立っているグラウンドに一台の車が停まった。

中から一人の男が降りてくると、涼子が男のもとに駆け寄った。

「あ、先生！」

「おっ、森沢！」

そう、男は彼女たちの担任で「九十九里少年探偵団」の監督でもある須崎雅彦だったのだ。

「…とりあえず早乙女から電話で話を聞いたが、どういふことが、詳しく教えてくれないか？」

「こつちです！」

そういふと涼子は須崎とともに現場へと向かっていった。

「みんな。今、先生来たわよ！」

涼子と須崎が現場となった美術室に駆け込むと、信幸たち5人と一人、そして絵の作者である椎名早苗の7人がいた。

「…これがその絵か…」

そう聞いた須崎が切り裂かれた絵をまじまじと見る。

と、そのときだった。

「…あ、須崎選手…じゃなかった。須崎先生、ですよね」

一人が須崎に話しかけてきた。

「…君は？」

「あ、早乙女唯の兄で一人と言います。妹がいつもお世話になっています」

そういふと一人は須崎に向かって軽くお辞儀をする。

「…じゃあ君か。早乙女の言っていたお兄さん、ってのは」「はい」

「いや、君の妹から連絡があつて来てみたんだが…。一体どういう状況で起きたんだ？」

「いえ、ちょうど唯たちと昼飯を食っていたときに同じクラスのヤツが呼びに来て、来てみたらこうなっていたんですよ」

「…それは何時ごろのことか覚えているか？」

と、和美が、

「…確か早乙女さんのお兄さんが昼ごはんを食べよう、ってことで時計見たときにボクも持っていた携帯電話を見たんですが、そのときが確か11時40分ごろで、早乙女さんが先生に連絡をする、ってことでお兄さんから携帯電話を借りたときにボクも取り出して時間を見たんですが、そのときが12時40分ごろだったと…」

「…となると、その1時間の間に何かがあつた、ってことか…」

「そういうことになりますね」

「…でも、そうだとすると犯人は限られますよ」

椎名早苗が言う。

「…どういうことだ？」

一人が聞く。

「ちょうどその頃昼休みでしたから、昼休みの間はどこも展示をお休みするので、中には入れるのは美術部員だけですから…」

「…そういえばそうだったな」

一人が言う。

「それで、昼休みは美術部員が見回りを兼ねて美術室に入るんですけど、今日は確か松野さんたち…」

「…松竹梅か？」

一人の言葉に椎名早苗が頷く。

「…なんだ、その松竹梅、って？」

須崎が聞く。

「あ、ウチの学校の美術部員なんですよ。松野香緒里、竹原久美子、梅沢寿代の苗字から松竹梅、って言ってるんですけどね」

一人がそう説明する。

と、その傍らでさつきからじつと信幸が切り裂かれた絵を見ている。

「…どうしたの？ 鶴田君。さつきからずーっと絵を見たままだけど…」

唯が信幸に話しかけた。

「いや。何か引っかかるんだよな…」

「引っかかる、って…」

「いや、この絵の切り方がなんか気になるんだよな…」

「どこが気になるの？」

「どっつて、言われてもなあ…、なんか気になるんだよな」

そう言いながら信幸はじつと切り裂かれた絵を見ている。

…と、

「…待てよ。もしかしたら」

そして絵が切り裂かれた部分をじつと目で追うと、

「…そうか、なんか感じていた違和感はこれだったんだ！」

そう言つと信幸は唯のほうを向く。

「唯ちゃん。ちよつと頼みがあるんだけど、いいかな？」

「…お兄ちゃん、ちよつといい？」

唯が一人に話しかけた。

「…どうした？」

「ちよつとお願いがあるんだけど…」

\*

「松野、ちよつといいか？」

一人が松野香緒里に話しかけた。その傍らには唯が立っている。

「？ どうしたの？」

そういつと松野はメールチェックでもしていたか、右手に持っていた携帯電話を折りたたむとブレザーの胸ポケットにしまいこんだ。

「…椎名の絵が切り裂かれたことに付いて聞きたいんだけど」

「…もしかして早乙女君、あたしがやったと思ってるの？」

「いや、そんなことは思ってるないさ。でも、聞いた話だと椎名の絵は昼休みに切り裂かれていた、その昼休みにお前がいた、って言うからさ」

「だからって、あたしがやるわけないでしょ？ 確かに早苗の絵が入選したのは悔しいけどさ、これで終わりってわけじゃないし、他人の絵を切り裂くなんて、そんなの絵に対する最大の冒瀆だと思うわ。それに…」

「それに？」

「あの後久美子だって寿代だって美術室に入ってたのよ。二人にも話を聞いたら？」

「…勿論、後で聞くよ。…行くぞ、唯」

「うん」

\*

「…竹原」

一人が話しかける。と、竹原久美子は誰かに電話をしていたか、左手に持った携帯電話で話をしていたようだ。

と、一人に気がついたか、

「…じゃ、また後で電話するから」

そう言うと彼女もまた松野香緒里と同じように左手に持っていた携帯電話をブレザーの胸ポケットにしまった。

「…早乙女君、一体何の用なの？」

「ん？ ちょっとお前に聞きたいことがあってね」

竹原はそう言うと、一人の傍らに立っている唯を見ると、

「あら、妹さんも一緒なのね」

「まあな。椎名の切り裂かれた絵のことについて聞きたいんだけど…」

「…いい加減にしてよ。あたしこれから用があるんだから」

「5分や10分くらいいいだろ？」

そういわれて右腕にはめた時計を見る竹原。

「…仕方ないわね。もしかして早乙女君、あたしがやったと思ってない？」

「いや、そうは思ってないよ」

「あたしがそんなことするわけないでしょ？ 美術部員、って言うのは絵を誰よりも愛しているんだからそんなことするはずないじゃないの。それよりも香緒里や寿代も美術室にいたんだから、二人にも話を聞いたらどう？」

「…わかってるよ」

\*

校内備え付けの自動販売機の前で一人の女子高生が缶ジュースを飲んでいた。

「梅沢、ちよつといいか？」

一人がその少女・梅沢寿代に話しかけた。

「何？ あげないわよ！」

そう言うつと梅沢は右手に持っていた缶ジュースの缶の飲み口を左手でふさぐ。

「誰がお前の飲みかけのジュースなんか欲しがるか」

「じゃあ何の用よ？」

「椎名の絵の件だよ」

「早苗の？」

「ああ。なんか椎名の顔見てたら、かわいそうになっちゃってさあ。何とかしてやりたい、と思ってさ」

「ふーん。早乙女君もいいところあるのね。…それで早乙女君、もしかしてあたしがやったと思ってんの？」

「いや、そうは思ってないけどさ…」

「…仕方ないわね。事件が起きた頃、あたしも美術室にいたしね。…でも早乙女君だって美術室に行っただから知ってるでしょ？」

早苗の絵が飾ってあったところって外からじゃ見えない死角になってるから、誰だって切り裂こうと思えば切り裂くことが出来るわよ。

それに昼休みの見回り、あたしが一番最初で、そのときには切り裂かれていなかったもの。香緒里か久美子がやったんじゃないの？」

「わかったよ、有難う」

そういうと一人と結いはその場を離れた。

\*

「さて、お前の頼みで3人に話を聞いてやったけど、どう思った、唯？」

一人が唯に話しかけた。

「うーん。もしあの3人の誰かが犯人だしたら、他の二人が真犯人をかばう、ってことあるのかしら？」

「それはあるかもしれないな。ああ見えて松竹梅の3人は仲がいいし、今は椎名、と言う共通の敵がいるからな」

「となると、あれが直接の証拠、ということになるのかな……」

そついいながら美術室に入る兄妹。

「どうだった？」

信幸が唯に聞く。

「うん、バツチリ。鶴田君の考えが正しかったら、犯人はあの人じゃないわ。……ねえ、お兄ちゃん。あの人を呼んでくれない？」

\*

「早乙女君、あたしに用、って何？」

竹原久美子が美術室に入ってきた。

「竹原。お前なんであんなことしたんだ？」

一人がいきなり言った。

「あんなこと、って何よ？」

「お前だろ？ 椎名の絵を切り裂いたのは」

その言葉に一瞬言葉に詰まる久美子。

「ちよ、ちよっと、何言ってるのよ。あたしがそんなことするわけないでしょ？ 確かにあたしじゃなくて早苗が入選したのは悔しいけれど、だからと言って早苗の絵を切り裂くなんて……」

「それはどうかな？ こいつらがお前がやった、って言う証拠を

見つけた、って言うぜ」

そういうと一人は信幸たちをを親指で刺した。

「証拠ですって?」

「お前ら、説明してやれ」

一人はそう言うつと信幸たちに先を促した。

「あの絵を見たときにオレは何か違和感を感じたんですよ」  
信幸が言う。

「違和感ですって?」

「あの絵の切り裂かれた後なんですよ……」

と、信幸は切り裂かれた絵を指差す。

「あの絵、左上から右下にかけて、切り裂かれていますよね」

「それがどうしたの?」

「だって、もしこれがオレみたく右利きの人だったら……」

と、信幸は絵の前に立つと、右上から左下へ切り裂くような真似をする。

「……とこう言ったように右上から左下に切り裂いたほうがやりやすいんですよ。でもこの絵は左上から右下にかけて何回も切り裂かれています……。つまりこれは犯人が左利きの間じゃないか、と言う気がしたんですよ。それで唯ちゃんに頼んでお兄さんと二人で松野さん、竹原さん、梅沢さんにそれぞれ話を聞いてさりげなく調べてもらったんですが、その中で左利きだったのがあなただったから、もしかして、今回の事件はあなたが犯人じゃないか、と思ったんですよ」

「どうしてあたしが左利きだと思ったの?」

「だって時計、右手にしているじゃないですか」

「あら。それだけであたしが左利きだってわかっちゃうの?」

「勿論中には右利きでも好きで右手にしている人もいますよ。でも唯ちゃんが言うてましたけど、あなた左手で携帯電話使ってたそうじゃないですか。そう考えるとあなたが左利き、と考えるのが自然

なんですが」

…と、

「…驚いた。そこまでわかつちやうとはね」

「…じゃあ、竹原。お前…」

「そう、今回の事件の犯人はあたしよ。あたしがあの絵を切り裂いたの」

「…動機は椎名に対する嫉妬か？」

「…そうね。あたし、香緒里や寿代と比べても一番絵がうまいと思っていたのよ。それなのにあたしたちの絵じゃなくて早苗の絵が入選したから、なんか悔しくなっちゃって…。たまたま力ツター持ってたから衝動的にやつちやったのよ」

「衝動的に、つてお前…」

「…そう、確かに切り裂いた瞬間はスッキリしたわ。でも、なんだか悲しむ早苗の顔を見てたら自分でもとんでもないことした、つて思ったわ。だつてあたしだつて早苗と同じくらい芸術を、絵を愛しているんですもの。絵を愛するものとしてこんなこと、やつちやいけなかつたんですものね…、今は早苗に申し訳ないと思つてるわ」

\*

数日後、早乙女家の夕食の席。

「…で、お兄ちゃん。結局あの件、どうなったの？」

唯がテーブルの向かいに座っている一人に聞いた。

「ああ、あれか。結局学校内で起こった事だつたし、絵のほうも何とか修復できることがわかつたそうだし。竹原が椎名に謝つて終わつたよ」

「ふーん…」

「…それにしても、嫉妬つてのは怖いね」

「何で？」

「友達つて言つてて、表面上は仲良くしてても、本当のところは何を考えているかわからないんだからな。唯、お前も気をつけろよ」

「そんなこと無いと思うけどね」  
一人の言葉に思わず苦笑いをする唯だった。

（終わり）

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7386d/>

---

九十九里少年探偵団シリーズ「高校文化祭の事件」

2009年6月21日22時46分発行